

## 【論文】

# ネルソン提督の再来？

—— ナポレオン戦争時代のイギリス海軍の「神話」とコクリン卿 ——

中村 武司

はじめに

1. バスク・ロードの勝利への反響
2. 議会による感謝決議の意味
3. 2つのウェストミンスタ選挙
4. ナポレオン戦争後のラディカリズムとコクリン

おわりに

はじめに

本稿の課題は、ナポレオン戦争時代、とくにトラファルガルの戦い（1805年）以降のイギリス海軍の「国民的神話」を、当時のラディカリズムとの関係に注目して考察することにある。

長い18世紀イギリスの政治文化において、海軍（the Royal Navy）は重要な位置を占めていた<sup>1</sup>。専制的・抑圧的とされた陸軍とは対照的に、海軍はイギリスの自由やプロテスタンティズム、愛国心、貿易、帝国の構想と不可分に結びつき、人びとの立場や利害の違いにかかわらず、その意味や役割について広範な国民的合意がみられたのである。ひるがえって海軍は、イギリス（ブリテン）

---

<sup>1</sup> 長い18世紀イギリスのパトリオティズム（愛国主義・愛国心）や自由、あるいは帝国イデオロギーをめぐる問題を検討するにあたり、海軍の勝利や英雄が事例としてとりあげられてきた。Kathleen Wilson, 'Empire, trade and popular politics in mid-Hanoverian Britain: the case of Admiral Vernon', *Past and Present*, cxxi (1988), pp. 74–109; idem, *The sense of the people: politics, culture and imperialism in England, 1715–1785* (Cambridge: Cambridge University Press, 1995), chapter 3; Gerald Jordan and Nicholas Rogers, 'Admirals as heroes: patriotism and liberty in Hanoverian England', *Journal of British Studies*, xxviii (1989), pp. 201–24; Stephen Conway, 'A joy unknown for years past: the American war, Britishness and the celebration of Rodney's victory at the Saints', *History*, lxxxvi (2001), pp. 180–99; Nicholas Rogers, 'The dynamic of news in Britain during the American War: the case of Admiral Keppel', *Parliamentary History*, xxv (2006), pp. 49–67; Timothy Jenks, *Naval engagements: patriotism, cultural politics, and the Royal Navy, 1793–1815* (Oxford and New York: Oxford University Press, 2006); Sarah Kinkel, 'Saving Admiral Byng: imperial debates, military governance and popular politics at the outbreak of the Seven Years' War', *Journal for Maritime Research*, xiii (2011), pp. 3–19.

という国民共同体を想像／創造するうえでの媒体として機能していたとも考えられる。海軍史研究の泰斗N. A. M. ロジャーの言葉を借りれば、「海軍力をめぐるイングランドの国民的神話」が当時成立していたのである。ただし、この「神話」の政治的利用に成功していたのは、18世紀前半ではもっぱら野党側、とくに愛国派ホイグであったが、18世紀末以降は体制側へとシフトする<sup>2</sup>。なぜそのような変化が起こったのか。

筆者もすでに論じたことがあるが、18世紀末から19世紀初頭にかけて、イングランド最大の都市選挙区ウェストミンスターでは、ロドニ提督やフッド提督のような著名な海軍士官が政府に擁立され、議員として継続的に選出されていた<sup>3</sup>。このことは、体制による海軍の「神話」の横領の顕著な例とみなせる一方で、フランス革命戦争にともなう善悪二元論的な政治状況では、革命フランスという極端なリパブリカニズムと国内の改革支持者に対峙するうえで、体制にとってこそ海軍とその英雄の存在は重要な意味を帯びたのである。

1807年のウェストミンスター選挙では、2名の議会改革派が当選する。いわゆる「急進的なウェストミンスター (radical Westminster)」のはじまりである<sup>4</sup>。それでもなお、海軍士官が議席のひとつを占めるという状況に変化はみられなかった<sup>5</sup>。これは、海軍の「神話」が急進派に有利なかたちで作用したことをはたして意味するのだろうか。仮にそうだとすれば、その歴史的脈絡をどう理解したらよいのか。かかる問題関心から、本稿は、ウェストミンスター選挙区にみられる連続と変化の問題を手がかりとして、ナポレオン戦争時代における海軍の「国民的神話」の意味について考察を試みる。具体的には、1807年から18年にかけて同選挙区を代表した海軍士官にして急進派の政治家、トマス・コクリン (Thomas, Lord Cochrane, 10th Earl of Dundonald, 1775–1860) を対象に<sup>6</sup>、海軍の勝

<sup>2</sup> N. A. M. Rodger, 'Queen Elizabeth and the myth of sea-power in English history', *Transactions of the Royal Historical Society*, 6th ser., xiv (2004), pp. 153–74. 近年、薩摩真介氏が、ロジャーの研究を批判的に継承して、とくにスペイン継承戦争期における海戦支持の言説を詳細に分析している。同「儲かる戦争——ブリテンにおける海戦支持の言説と党派抗争、1701–1713」『歴史学研究』903号(2013年)、29–47頁。Shinsuke Satsuma, *Britain and colonial maritime war in the early eighteenth century: silver, seapower and the Atlantic* (Woodbridge: Boydell Press, 2013).

<sup>3</sup> 中村武司「ウェストミンスター選挙区における体制支持派の提督とイギリス海軍の「神話」、1780–1806年」『西洋史学』254号(2014年)、19–37頁。当該時期のウェストミンスター選挙の経緯と候補者については、議会史財団による一連の庶民院議員研究を参照のこと。現在では、History of Parliament Online <URL=<http://www.historyofparliamentonline.org>>として無料で利用できる。

<sup>4</sup> E. P. Thompson, *The making of the English working class* (London: V. Gollancz, 1963), chapter 13 [市橋秀夫・芳賀健一訳『イングランド労働者階級の形成』(青土社、2003年)]. J. M. Main, 'Radical Westminster, 1807–1820', *Historical Studies: Australia and New Zealand*, xii (1966), pp. 186–204; Marc Baer, *The rise and fall of radical Westminster, 1780–1890* (Basingstoke and New York: Palgrave Macmillan, 2012).

<sup>5</sup> この問題にかんしては、筆者はすでに1806年と1807年の選挙を対象に検討したことがある。中村武司「急進的なウェストミンスターを見直す」、『人文社会論叢・人文科学篇』(弘前大学人文学部)、34号(2015年)、19–38頁。

<sup>6</sup> 海軍士官としての高い人気とその劇的な生涯から、コクリンの伝記は数多く出版されている。Christopher Lloyd, *Lord Cochrane: seaman, radical, liberator* (London: Longmans, Green & Co 1947, reprinted in 1998); Warren

利や英雄をめぐる人びとの反応や認識、想像力のありようを検討してゆく。そのさい、フランス革命・ナポレオン戦争の時代に、政府のイニシアティブにより進められた軍人のコメモレイションにも注意を向けることとしよう。

考察にあたり、19世紀初頭のラディカリズムの展開について述べておく必要がある<sup>7</sup>。フランス革命の影響が強調される1790年代、E. P. トムソンのいう1810年代後半の「民衆ラディカリズムの英雄時代」<sup>8</sup>にたいして、そのはざまにあるナポレオン戦争時代は、かつての研究では急進派のプレゼンスが衰えたかのように考えられる傾向にあった。しかし1990年代以降、こうした解釈は見直されつつある。ピーター・スペンスやフィリップ・ハーリングらの研究によると、当時の急進派は、戦争の遂行と議会・行財政改革の主張を結びつける一方で、イギリスの自由や国制を擁護する愛国者としての立場を明確にすることで、人びとの支持を獲得した。その戦略・レトリックから、この時期のラディカリズムは、「復古的」とも「ロマン的」とも形容される。多様な由来や立場、主張をもつ急進派が、ナポレオンと「旧き腐敗 (Old Corruption)」を共通の敵として結束しえたのである<sup>9</sup>。こうした見方からすると、この時代のイギリスのラディカリズムを考えるためには、フランス革命とその影響という脈絡にただ回収するのではなく、ナポレオン戦争時代のもつ固有の意味こそが問われなければならないこととなる。コクリンの事例の考察から、当時のラディカリズムへ

---

Tute, *Cochrane: a life of Admiral the Earl of Dundonald* (London: Cassell, 1965) ; Francis Knight, *Rebel admiral: the life and exploits of Admiral Lord Cochrane, tenth Earl of Dundonald* (London: Macdonald, 1968) ; Ian Grimble, *The sea wolf: the life of Admiral Cochrane* (Edinburgh: Birlinn, 1978) ; Donald Thomas, *Cochrane: Britannia's last sea-king* (London: Deutsch, 1978) ; Robert Harvey, *Cochrane: the life and exploits of a fighting captain* (London: Robinson, 2000) ; Brian Vale, *The audacious Admiral Cochrane: the true life of a naval legend* (London: Conway Maritime, 2004) ; David Cordingly, *Cochrane the dauntless: the life and adventures of Thomas Cochrane* (London: Bloomsbury, 2007). 学術的な伝記研究として、コクリンの前半生を考察したものだが、John Sugden, 'Lord Cochrane, naval commander, radical, inventor (1775-1860) : a study of his earlier career, 1775-1818' (unpublished Ph.D dissertation, University of Sheffield, 1981) がある。

<sup>7</sup> フランス革命・ナポレオン戦争時代のイギリスにおけるラディカリズムにかんしては、H. T. Dickinson, *British radicalism and the French Revolution, 1789-1815* (Oxford: Blackwell, 1985) や John Belchem, *Popular radicalism in nineteenth-century Britain* (Basingstoke and New York: Palgrave Macmillan, 1996), chapter 2が簡にして要をえたサーヴェイである。

<sup>8</sup> Thompson, *The making*, p. 603.

<sup>9</sup> Philip Harling, *The waning of 'Old Corruption': the politics of economical reform in Britain, 1779-1846* (Oxford: Clarendon Press, 1996) ; idem, 'A tale of two conflicts: critiques of the British war effort, 1793-1815', in Mark Philp (ed.), *Resisting Napoleon: the British response to the threat of invasion, 1797-1815* (Aldershot: Ashgate, 2006), pp. 19-40; Peter Spence, *The birth of romantic radicalism: war, popular politics and English radical reformism, 1800-1815* (Aldershot: Scolar Press, 1996). また、以下の論考も参照されたい。Rachel Eckersley, 'Of radical design: John Cartwright and the redesign of the reform campaign, c.1800-1811', *History*, lxxxix (2004), pp. 560-80; Stuart Semmel, 'Radicals, loyalists, and the Royal Jubilee of 1809', *Journal of British Studies*, xlvi (2007), pp. 543-69. 金澤周作「旧き腐敗の諷刺と暴露——19世紀初頭における英国国制の想像／創造」、近藤和彦編『歴史的ヨーロッパの政治社会』(山川出版社、2008年)、444-79頁。

の新たな理解をえることもまた、本稿の目的をなしている<sup>10</sup>。

ここで簡単に本稿の構成を説明しておく。第1章と第2章で注目するのは、1809年のバスク・ロードの戦いにおける海軍の勝利である。これは、トラファルガル以降のナポレオン戦争時代において、議会による感謝決議（vote of thanks）の栄誉を浴した最後の海軍の勝利として知られる。第1章では勝利とコクリンについての人びとの反応や認識とその背景を確認したのち、続く第2章では感謝決議がもつ意味にかんして、当時のコメモレイションの文化に留意しつつ考察する。第3章では、1812年と1814年のウェストミンスター選挙を対象に、海軍の英雄の存在が選挙や首都の民衆政治にどう影響したのかを考えることとする。第4章ではナポレオン戦争直後の時期にも目を向け、当時のラディカリズムにおけるコクリンの位置づけを確認するだけでなく、海軍の「神話」の意味も探り、最後に結論を述べることにしよう。

このように本稿は、ほぼ時系列にそって議論を進めてゆくが、紙幅の関係から、議会におけるコクリンの発言や行動をほとんど検討しないとあらかじめ断っておく。

## 1. バスク・ロードの勝利への反響

1809年4月中旬、ジェイムズ・ガンビア提督を司令長官とするイギリス海峡艦隊は、シャラント川河口に近いエクス島沖に停泊中のフランス艦隊を攻撃し、勝利をおさめた。イギリスではこれをバスク・ロードの戦いという。この戦いで奇襲作戦を成功させ、勝利の第一の功労者とされたコクリンは、人びとから「第2のネルソン」、「ネルソンの後継者」と称賛されたのである<sup>11</sup>。コクリンの政治的立場にたいし賛否が分かれていたロンドンの新聞も、こぞって彼に賛辞を送った。たとえば『タイムズ』紙の特派員は、彼の若さ、勇敢さを強調したのち、こう記した。「船舶、植民地、商業の獲得というナポレオンの野望はいまや崩壊した。……コクリンという名はネルソンと同様に、ナポレオンには忌むべきものとなるだろう」[傍点は筆者によるもの。原文ではイタリック。以下同様]<sup>12</sup>。1807年総選挙ではコクリンに批判的であった『クーリエ』紙も、彼の働きから、亡き国民的英雄を回顧している。「われわれは、彼の個性から、ネルソン卿の個性のなかに明確にみられたものを想起している。彼はあの不滅の英雄の業績をたどることもできるだろう。（彼に誇り高き死

<sup>10</sup> 本稿と題材を同じくする研究として、Jenks, *Naval engagements*, chapter 5. ジェンクスの研究は、当時のラディカリズムとの関連から、コクリンを最初に考察したという点で評価されよう。しかし、海軍のパトリオティズムや象徴をめぐる修辞上の抗争を問うというある種の言語還元論的なアプローチでは、ラディカリズムそれ自体を批判的に検討しえないうえに、そもそも海軍とその英雄の存在が、当時の人びとにとってどんな意味をもったのかが、彼の研究からはほとんどみえてこない。

<sup>11</sup> E.g., *Morning Post*, 22 April 1809, p. 2; 28 April 1809, p. 3; *The Daily Advertiser, Oracle, and True Briton*, 26 April 1809, p. 4. バスク・ロードの戦いとその意義については、さしあたり以下を参照せよ。N. A. M. Rodger, *The command of the ocean: a naval history of Britain, 1649–1815* (London: Penguin Books, 2004), pp. 555–6.

<sup>12</sup> *The Times*, 27 April 1809, p. 3.

を望むかは別にして)ネルソン卿がそうだったように、勝利と栄光のうちに死ぬかもしれない」<sup>13</sup>。また急進系のリー＝ハント兄弟の『エグザミナー』誌は、コクリンを称えて、ネルソンと同様に、真のイギリス人をして「陸上においては高潔 (incorruptible)、海上においては無敵」にした自由の精神を備えていると評した<sup>14</sup>。戦いののち、コクリンへのバス勲章の叙勲がただちに決定されたのは、当時の彼への高い評価を物語ると同時に、政府にとってこの勝利がいかに重要であったかを示唆している<sup>15</sup>。

なぜ当時のイギリス国民は、バスク・ロードの勝利にかくも熱狂したのか。1808年のスペイン半島戦役の開始以降、イギリスの世論は政府批判に大きく傾き、急進派の勢力が増しつつあった。その背景には、陸軍のあいつぐ失態とスキャンダルがある。シントラ協定の締結 (1808年) やヨーク公事件 (1809年)、ラ・コルニャにおけるサー・ジョン・ムーア将軍の戦死 (1809年) といった出来事から、ナポレオン戦争という国家的危機の時期に、国制や支配エリートだけでなく、軍隊も多くの腐敗で蝕まれていると強く懸念されたのである<sup>16</sup>。さらには、海軍の失態とイギリス帝国の危機さえも予見された。戦況の膠着にくわえ、フランス艦隊がイギリス艦隊の海上封鎖を破って、西インド諸島の英領植民地を攻撃する危険性が高まっていたのである<sup>17</sup>。

こうした状況にあっては、ネルソンのような海軍の英雄の出現を人びとが切望したとしても、何ら不思議ではなかった。有名なネルソン伝の作者としても知られるロバート・サウジは、海軍士官である弟トマスにあてた書簡のなかでこう記している。「わたしたちは、陸軍でもネルソンを必要としています」。彼は続ける。「もし、コクリンのような人間がわずかでも陸軍にいれば——海上でみられるように、陸上にあっても、同じ信頼をイギリス海軍にいたく人間がいるとしたら、その信頼はわたしたちに名誉を回復してくれることでしょう」<sup>18</sup>。弟から聞かされて、サウジはコクリンのことを高く評価していたのである。しかも彼は、革命や改革運動への共感をまだ失っていなかった

<sup>13</sup> *The Courier*, 22 April 1809, p. 4

<sup>14</sup> *The Examiner*, 23 April 1809, p. 270. Cf. *The Leeds Mercury*, 29 April 1809, p. 3.

<sup>15</sup> Arthur Aspinall (ed.), *The later correspondence of George III*, 5 vols (Cambridge: Cambridge University Press, 1962–70), v, pp. 259–60: no. 3865, the Duke of Portland to the King, and the reply, 23 April 1809; *Morning Post*, 27 April 1809, p. 3. コクリンがスコットランド貴族であるダンドナルド伯の嫡子であることを考慮しないにしても、当時33歳という若い勅任艦長にバス勲章が授与されたのは、1782年のジョン・ジャーヴィス (のちのセント・ヴィンセント伯) をのぞけば例がなかった。William Arthur Shaw, *The knights of England: a complete record from the earliest time to the present day of the knights of all the order of chivalry in England, Scotland, and Ireland, and knights bachelors*, 2 vols (London: Sherratt and Hughes, 1906), i, pp. 167–79 より確認。

<sup>16</sup> Spence, *The birth of romantic radicalism*, chapters 5 and 6; Philip Harling, 'The Duke of York affair (1809) and the complexities of war-time patriotism', *Historical Journal*, xxxix (1996), pp. 963–84.

<sup>17</sup> Thomas Cochrane, 10th Earl of Dundonald [Lord Cochrane], *The autobiography of a seaman*, 2 vols (London: Constable, 1995–6, originally published in 1860–1), i, p. 340.

<sup>18</sup> Charles Cuthbert Southey (ed.), *The life & correspondence of the late Robert Southey*, 6 vols (London, 1849–50), iii, pp. 210–1: Robert Southey to Thomas Southey, 3 February 1809. Cf. *Cobbett's Weekly Political Register* (以下、CWPRと略記する), xv, 21 January 1809, col. 66. トマス・サウジは、コクリンのもとで勤務した経験があった。

ようだ。彼が執筆した『エディンバラ・アニュアル・レジスタ』誌の記事に、それをみることができる。

議会外では、この小さな党派〔急進派のこと。筆者による補足。以下同様〕はコクリン卿を味方にすることで大きな力をえていた。コクリン卿のたぐいまれなる才能と冒険心に富んだ勇氣は、われらが偉大なるネルソンの位置を埋める機会だけを彼が欲しているというたしかな証拠を提示していた。きっとわたしは、彼を何らかの党派に区別するという間違いを犯しているのかもしれない。というのは、彼はいつも改革派とともに票を投じているけれども、じつに船乗りらしくイギリス人らしい気質から、あらゆる党派根性を否定し、国の破滅の原因としてそれをいみじくも非難しているのだ<sup>19</sup>。

そこで次に、急進派がコクリンの戦功にどう反応したのかをみておこう。戦いの直後の1809年5月1日、ストランド街の「王冠と錨 (Crown and Anchor)」亭において、議会改革派の大規模な夕食会が催された<sup>20</sup>。コクリンもこの会合に出席し、イギリス各地から集まった改革支持者たちから熱狂的に迎えられたのである。サー・フランシス・バーデットは、このときの演説で、イギリス陸軍と外国人傭兵への依存を批判したのち、コクリンのことを「われわれの歴史のいついかなる時代と同じく、イギリス人の意気がいまや高まっていることを確信します」と絶賛したのだった<sup>21</sup>。ヨーク公事件の扇動者であるグウィリン・ロイド・ウォードルも、コクリンへの称賛では人後に落ちなかった。「今回の出来事を想い起こせば起こすほど、ジャコバンのレッテルがわたしに貼られることが、いっそう誇らしく感じられます。……彼〔コクリン〕は、国制上の原則にしたがって発言をした、その議会においてジャコバンという烙印を押されたからです。彼の発言は、海軍で反乱を惹起するものだとも非難されました」<sup>22</sup>。このようなウォードルの発言は、諷刺版画でしばしばみられた「革命化したジャック・タール」としてのコクリンの表象を連想させるものがある<sup>23</sup>。バスク・ロードにおける海軍の勝利は、ともすれば急進派から懐疑的にみられていたコクリンの立場を改善し、その声望を高めたのである<sup>24</sup>。

<sup>19</sup> *Edinburgh Annual Register*, i, part 1 for 1808 (1810), p. 13.

<sup>20</sup> この夕食会については、J. Ann Hone, *For the cause of truth: radicalism in London, 1796–1821* (Oxford: Clarendon Press, 1982), pp. 172–6; Spence, *The birth of romantic radicalism*, pp. 125–8 もみよ。

<sup>21</sup> *Parliamentary reform: a full and accurate report of the proceedings at the meeting held at the Crown and Anchor Tavern on Monday, 1 May, 1809, relative to a reform in the Commons House of Parliament* (London, 1809), pp. 15–6.

<sup>22</sup> *Ibid.*, p. 28; W. Hamilton Reid, *Memoirs of the life of Colonel Wardle* (London, 1809), p. 82.

<sup>23</sup> 前掲拙稿「急進的なウェストミンスタを見直す」、35–7頁。

<sup>24</sup> ロバート・サウジは、友人にあてた書簡のなかで、コクリンの勝利が急進派の人気を大いに高めたと記している。Carol Bolton and Tim Fulford (eds), *The collected letters of Robert Southey, part 3, 1804 to 1809*: no. 1625, Robert Southey to Humphrey Senhouse, 7 May 1809 <URL=[https://www.rc.umd.edu/editions/southey\\_letters/Part\\_Three/HTML/letterEEd.26.1625.html](https://www.rc.umd.edu/editions/southey_letters/Part_Three/HTML/letterEEd.26.1625.html)>.

だが人びとの勝利への熱狂は、すぐに失望へと変わっていった<sup>25</sup>。まず、前任権を無視して奇襲作戦の命が海軍省からコクリンに下ったことは、海峡艦隊の士官たちの不満を招いていた。とくにサー・エライアブ・ハーヴェイ少将は、上官であるガンビアを面罵したため、5月下旬に開催された軍法会議の結果、海軍より罷免されたのである<sup>26</sup>。その一方で、ウィリアム・ワーズワースが「あの高貴なる英雄は戦果にひどく失望している」と述べたように、コクリンの不満も世間に広く伝わっていた<sup>27</sup>。しかも彼本人が、次章で検討する議会による感謝決議の提案に強く反対したため、ガンビアが軍法会議の開催を要求する事態に発展したのである<sup>28</sup>。「海軍史上、最も異様な出来事のひとつ」と評されたこの会議は、7月末から8月初めにかけて開催され、ガンビアの「名誉ある釈放」という判決を下して閉廷した<sup>29</sup>。これにより感謝決議の提案は、ひとまずは正当化された。

感謝決議へのコクリンの反対と軍法会議の開催には、賛否さまざまな見解がみられたが、本稿の関心にとって興味深いのは、『ブリティッシュ・プレス』紙の記事である。同紙は、ガンビアにもコクリンにもとくに肩入れすることはなく、コクリンを任命したことで艦隊に不和をもたらし、不名誉な軍法会議を引き起こした「原罪」は閣僚たちにあると批判したのである。同紙はこうも論じている。「古き流派のひとりとして、ガンビア卿の指揮に責められるべきところはなかった。……コクリン卿は、新しき流派のひとりなのだ。彼は、ネルソン卿の流派と同じように考え行動したの

<sup>25</sup> 海軍の大勝利が期待されたにもかかわらず、フランス艦隊が徹底的に破壊されなかったことにたいして、人びとの不満が高まっていたのである。 *The Times*, 25 April 1809, p.3; *Morning Chronicle*, 26 April 1809, p.4; *The New Annual Register* (1809), p.298.

<sup>26</sup> *Naval Chronicle*, xxi (1809), pp.420–8; *The Times*, 23 May 1809, p.3; 24 May 1809, p.3; *The Examiner*, 28 May 1809, p.347. 1810年3月にハーヴェイは、トラファルガルなどにおける過去の功績を考慮されて、海軍に復帰した。

<sup>27</sup> Ernest de Selincourt, (ed.), *The letters of William and Dorothy Wordsworth: the middle years*, 2 vols (Oxford: Clarendon Press, 1937), i, pp.298–9: no. 373, William Wordsworth and Sara Hutchinson to Thomas De Quincey, 5 May 1809.

<sup>28</sup> Cochrane, *Autobiography*, i, pp.403–5. 海軍関係者の多くは、議員としての立場を利用してコクリンが反対したことに批判的だった。Kathlyn Cave, Kenneth Garlick and Angus Macintye (eds), *The diary of Joseph Farington*, 16 vols (New Haven and London: Yale University Press, 1979–84), ix, p.3475: 3 June 1809; Michael A. Lewis (ed.), *A narrative of professional adventures (1799–1839) by Sir William Henry Dillon*, 3 vols (London: Navy Records Society, 1953–6), ii, pp.120–1, 269.

<sup>29</sup> *Caledonian Mercury*, 15 June 1809, p.3. ガンビアの軍法会議の記録はすぐに公刊された。 *Minutes of a court martial holden on board his Majesty's ship Gladiator, in Portsmouth Harbour, on Wednesday, the 26th day of July, 1809, ... on the trial of the Right Honourable James Lord Gambier: ... , taken in short-hand by Mr W. B. Gurney* (Portsmouth, 1809). コクリンが自伝を出版した目的のひとつに、ガンビアへの感謝決議をめぐる彼の行動の正当化があったが、1810年に彼は、上述の軍法会議の記録への註釈というかたちでパンフレットを出版し、ガンビアと閣僚たちを強く批判した。[Lord Cochrane,] *Notes, on the minutes of a court martial: holden on board his Majesty's ship Gladiator, in Portsmouth Harbour, on Wednesday, the 26th day of July, 1809, &c. on the trial, of the Right Honourable James, Lord Gambier; Admiral of the Blue, &c.* (London, 1810). さらに彼は、『ガンブリアード (*Gambryiad*)』という諷刺詩の出版も試みている。これは、コクリンの個人秘書であったウィリアム・ジャクソンが執筆したもののだが、1814年の証券詐欺事件のために世に出ることはなかった。その草稿は、現在スコットランド国立文書館に所蔵されている。National Archives of Scotland, Dundonald Muniments, GD 233/81/83. この史料の閲覧を認めて下さった第15代ダンドナルド伯に記して謝意を表したい。

である」<sup>30</sup>。

こうした主張は、ガンビアの友人であるウィリアム・ウィルバフォースのそれとも通底するところがある。軍法会議が閉廷した直後、ウィルバフォースはガンビアにあて、彼の釈放を祝福した書簡を送った。そこで彼は、コクリンにみられるような、戦場での「不屈にして勇敢なヒロイズム」よりも実現するのがまれで困難な、真の「キリスト者のヒロイズム」の例をしめしたとしてガンビアを称えたのだった<sup>31</sup>。バスク・ロードの戦いを契機として、海軍のヒロイズムのありようが対照的に論じられたのである。

ところで近年、リチャード・ブレイクやギャレス・アトキンズが論じたように、ハノーヴァ朝後期の海軍においても、福音派は無視しえない影響力を保持していた<sup>32</sup>。その代表的人物とは、バラム卿チャールズ・ミドルトンとその甥ガンビアの両名である。前者は第2次ピット内閣の海軍大臣を、後者は三度にわたり海軍委員（Lord of the Admiralty）をつとめるなど、フランス革命・ナポレオン戦争時代の海軍行政やパトロネジにおいて重きをなしたのだった。また福音派は、上述したように、海軍の英雄のあり方について、彼ら独自の理想を提示しようとも試みたのである<sup>33</sup>。ただし、ウィリアム・コベットをはじめとする急進派は、小ピットの親友ウィルバフォースら「聖者たち」に懐疑的だったことは忘れてはならない<sup>34</sup>。バスク・ロードの戦いをめぐる一連の出来事において、人びとの大きな反響がみられたのは、海軍の勝利と英雄への期待感や切望（あるいは失望）のみならず、海軍内部における「賛美歌歌い（psalm-singer）」たちの隠然たる影響力への警戒心によっても考えられる。

<sup>30</sup> *British Press*, 24 May 1809, p.4; 1 August 1809, p.2; 7 August 1809, p. 2. Cf. *Mr Redhead Yorke's Weekly Political Review*, vii, 12 August 1809, pp.103–12.

<sup>31</sup> Georgiana Chatterton (ed.), *Memorials personal and historical of Admiral Lord Gambier*, 2 vols (London: Hurst and Blackett, 1861), ii, pp.328–9: Mr Wilberforce to Lord Gambier, 6 August 1809. このガンビアの伝記は、彼の姪であるジョージアナ・チャタートンが、コクリンの自伝を批判し、叔父に着せられた汚名を晴らすべく執筆したものである。

<sup>32</sup> Richard Blake, *Evangelicals in the Royal Navy, 1775–1815: blue lights and psalm-singers* (Woodbridge: The Boydell Press, 2008); Gareth Atkins, 'Religion, politics and patronage in the late Hanoverian navy, c.1780–c.1820', *Historical Research*, lxxxviii (2015), pp.272–90; idem, 'Christian heroes, providence and patriotism in wartime Britain, 1793–1815', *Historical Journal*, lviii (2015), pp.393–414.

<sup>33</sup> 新旧2つの『国民伝記事典』(*Dictionary of national biography*)の関連項目にも、それは看取される。旧『国民伝記事典』において、海軍史家サー・ジョン・ラフトンはコクリンの項目を肯定的に記した一方で、ガンビアにかんしては簡単にしか記述しなかった。それにたいして、現在の『オクスフォード国民伝記事典』では、海軍史家アンドルー・ランバートはコクリンを高く評価して執筆したものの、ガンビアの項目はブレイクが執筆し、海軍士官としての経歴だけでなく福音派としての活動についても記して、読者に注意を促している。*Oxford dictionary of national biography* <URL= <http://www.oxforddnb.com/index.jsp>>.

<sup>34</sup> E.g., Arthur Burns and Joanna Innes (eds), *Rethinking the age of reform: Britain, 1750–1850* (Cambridge: Cambridge University Press, 2003), pp.24–5.



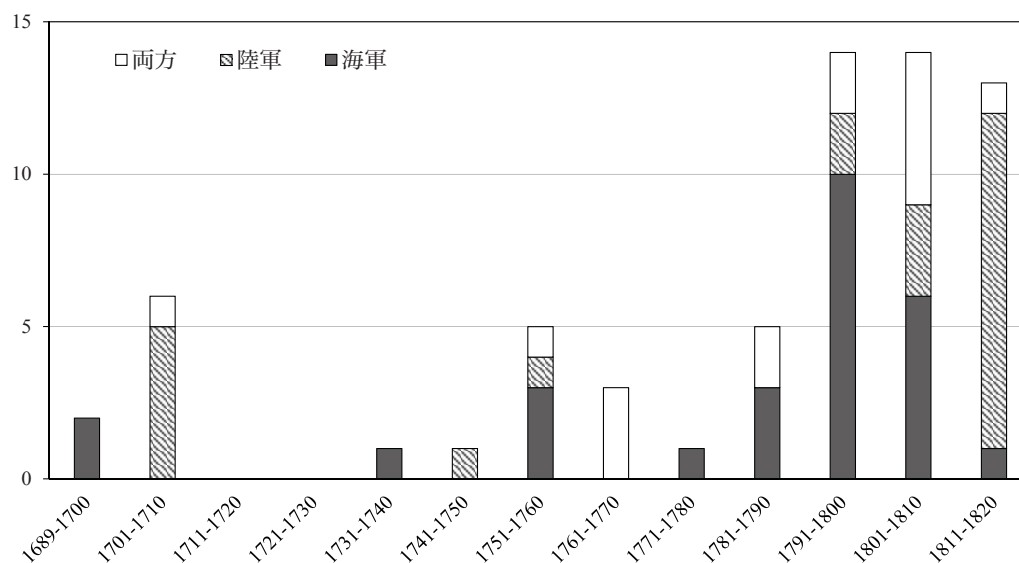


図1 庶民院が採択した感謝決議、1689-1820年

典拠：Journals of the House of Commons.

## 2. 議会による感謝決議の意味

前章ではバスク・ロードにおける海軍の勝利に注目して、当時の人びとの認識と反応を確認してきた。トラファルガル以降、海軍のプレゼンスが相対的に低下したかのように考えられがちだが、イギリスの自由や国制、帝国の守護者として、またパトリオティズムの鑑として、海軍とその英雄は、国民にとってなお重要であり続けたのである。ここではさらに、感謝決議に焦点をあて考察を進めよう。

1688-9年の名誉革命以降、貴族院・庶民院両院は、勝利に貢献した司令官に与える名誉として、感謝決議をしばしば採択してきた。とはいえ、その対象となる勝利とは、ブレンハイム（1704年）やケベック（1759年）、セイント（1782年）など、現在でも戦史に残る著名なものに本来は限られていたうえに、初代モールバラ公をのぞけば、一人の司令官が頻繁にこの名誉を授かることもなかった。同じ戦いに参加した司令官たちに複数決議された事例など、重複を無視して計算すると、1689年から1790年までの100年間に庶民院が採択した感謝決議は24件を数える。ところが、フランス革命・ナポレオン戦争時代に感謝決議の件数は急増する。1791年から1820年までの30年間で、その数は41件に達したのである（図1）。トラファルガルやワーテルローといった著名な勝利だけでなく、小規模でそれほど目覚ましくない勝利でも、小ピットとその後継内閣が感謝決議を提案したのが、急増の理由である。コクリンの言葉を借りていうと、「議会の感謝決議にふさわしい勝利として、……政治的資源に転換させる」ことが、政府のねらいであった<sup>35</sup>。

<sup>35</sup> Cochrane, *Autobiography*, i, p.405.

ここで注意しなければならないのは、議会による感謝決議が、フランス革命・ナポレオン戦争時代における軍人のコメモレイションの文化を構成する重要な一要素であったことである。筆者も考察したことがあるが、この時期に議会は、戦死した高級軍人を記念・追悼すべくセント・ポール大聖堂へのモニュメント建立を継続的に進めた。ほとんどの場合、庶民院で「満場一致で (nemine contradicente)」で感謝決議が採決されたのち、モニュメントの建立も決議されたのである。両者が密接に関係していることは言を俟たない。しかもトラファルガルの戦い以前、感謝決議の大半が、海軍の勝利を祝うべく提案された。こうしたコメモレイションは、海軍感謝祭 (1797年) やネルソンの国葬 (1806年) のような国家儀礼とならんで、海軍の「神話」の継承と再生産に寄与する一方で、政府による海軍とその英雄の横領という意味もあった<sup>36</sup>。

これにたいして、ホイッグや急進派は、感謝決議の提案につねに賛成票を投じたわけではなかった。ホイッグ貴族の出身であるミルトン卿 (のちの第5代フィツウィリアム伯) はこう喝破している。「どんな場合でも、感謝決議をおこなう習慣がついてしまいましたので、投票しないことは、[軍人への]ほとんど侮辱であると考えられています。しかし感謝決議は、その頻度から価値を喪失し、名誉や報奨ではなくなってしまったのです」<sup>37</sup>。彼らにとって、感謝決議の頻発は、名誉の価値の相対的低下を意味しただけではなかった。それは腐敗の徴候ともされたのである。

バスク・ロードの場合も、政府への批判とあいまって、感謝決議の是非をめくり議会で激論が交わされた。もっとも、この当時の急進派は、1790年代のような反戦的な態度をとることはなく、むしろ戦争の遂行を積極的に認めていたので、ときとしてその見解は、政府支持者以上に好戦的・マスキュリン男性的なものだった<sup>38</sup>。彼らは、ネルソンを模範として、あるべき海軍の勝利やヒロイズムのありようを主張しようと試みたのである。1810年1月29日、庶民院での感謝決議の審議に先立ち、コクリンが軍法会議の資料提出を要求したところ、法を侵害し再審を要求するものとして多くの議員が反対意見を表明するなか、バーデットは同僚を支持して次のように発言したのだった。

ガンビア卿の主たる関心は艦隊保全にあったように考えられます。しかし、ネルソン卿が、ナイルの戦いで、あるいはその命を失った栄光の戦いで、そんな原則で行動したとしたら、勝利の月桂冠を勇敢に勝ち取ることも、議会と国王から感謝と名誉を受けて頭角をあらわすことも決してなかったでしょう。ガンビア卿は、国王陛下の艦隊を戦闘で失わないことを望んでいたようです。これにたいして、わが同僚は、敵艦隊の破壊を望んでいた

<sup>36</sup> 以下の拙稿を参照されたい。中村武司「ネルソンの国葬——セント・ポール大聖堂における軍人のコメモレイション」、『史林』91巻1号(2008年)、176-97頁、同「帝国の殉教者たち——ナポレオン戦争時代のイギリスにおける軍人のコメモレイション」、『人文社会論叢・人文科学篇』(弘前大学人文学部)、29号(2013年)、37-58頁。

<sup>37</sup> *Parliamentary Debates* (以下、PDと略記する), 1st ser., xv, col. 280: Commons, 1 February 1810.

<sup>38</sup> E.g., Matthew McCormack, *The independent man: citizenship and gender politics in Georgian England* (Manchester, 2005), chapters 6 and 7.

のでした。艦隊保全の指示が軍法にあるという話を、わたしはこれまで聞いたことがありません。勇敢な士官たちの一般的な見解とは、勝利をえることなのです<sup>39</sup>。

庶民院の審議から数日後、『エグザミナ』誌は、「戦いではなく、信仰により (*Fide Non Armis*)」というモットーにもかかわらずガンビアに名誉が与えられたとして、辛辣なコメントを残した。「この名誉を要求するにあたって、かつては間違いなく嘲笑の対象となったものが、いまや公然と表明され、適当な理由として処理されてしまったのである」<sup>40</sup>。

軍事的失態やスキャンダルから生じた危機的状況に多くの国民が不安をいだくなか、1809年のバスク・ロードにおける勝利は、彼らに一時の安堵感と高揚感をもたらした。しかしながら、この海軍の勝利は、政府の求心力の回復に寄与することはなかった。むしろコクリンという海軍の英雄の存在は、政府への批判や反感をいっそう強めたとみるべきだろう。しかも彼の戦功と感謝決議への反対は、コメモレイションをつうじた体制による海軍の「神話」の横領への強い異議申し立てを意味したのである<sup>41</sup>。

### 3. 2つのウェストミンスター選挙

18世紀末から19世紀初めにかけて、ウェストミンスター選挙区から政府に擁立されて出馬した海軍士官たちは、アメリカやフランスとの戦争における功績から、高い名声を誇ったことでみな共通していた。選挙は、海軍の勝利と英雄の記憶を想起する重要な機会となると同時に、彼ら士官たちへの有権者の支持を促したのである<sup>42</sup>。それではコクリンの場合、海軍の英雄としての名声は、彼の急進派としての立場に強めることとなったのか。またそれは、ウェストミンスター選挙にどう影響したのだろうか。本章では、このような問題について、1812年総選挙と1814年補欠選挙を対象に考えることとしたい。

これらの選挙では、いずれも現職の議員が無風で再選を果たしたものの、このことは、コクリンの政治的立場が盤石であったことを意味しない。フランシス・プレイスをはじめとするウェストミンスター委員会 (*the Westminster Committee*) は、海軍士官である彼に批判的であったため、各選挙では対立候補擁立の動きがみられたのである。

プレイスによるウェストミンスター選挙の記録から、1812年総選挙では、ヨークシアの前議員ウォルタ・フォークス (*Walter Fawkes*) と、リヴァプールの前議員ウィリアム・ロスコウ (*William*

<sup>39</sup> *PD*, 1st ser., xv, col. 229; Commons, 29 January 1810; *CWPR*, xvii, 3 February 1810, cols. 178–80.

<sup>40</sup> *The Examiner*, 4 February 1810, p. 65. Cf. *The Times*, 13 February 1810, p. 3; British Museum, the Department of Prints and Drawings (以下、BMと略記する) 11355: *Sternhold and Hopkins at Sea or a Stave out of Time* (1809).

<sup>41</sup> ジェンクスは、バスク・ロードの戦いを仔細に検討していない。Jenks, *Naval engagements*, pp. 267–8.

<sup>42</sup> 前掲拙稿「ウェストミンスター選挙区における体制支持派の提督」をみよ。

Roscoe) の両名の出馬も検討されていたことが確認できる<sup>43</sup>。両者はともに改革派として奴隷貿易廃止運動にかかわったことで知られている<sup>44</sup>。とくにフォークスは、同年5月23日に開催されたバーデットの当選を祝う記念夕食会に招待されたほか、ウェストミンスター委員会主宰により「王冠と錨」亭で9月28日に開催された選挙集会では、コクリンにかわる候補として推薦されたのである<sup>45</sup>。

しかし同日、コクリンが出馬の意志を表明したことにより<sup>46</sup>、同委員会は候補者の再考を余儀なくされた。選挙への政府の干渉を危惧した彼らは、交渉のすえ、コクリンの立候補を受け入れたのである。それでもジョン・カートライト少佐は、10月6日の選挙集会において、コクリンが軍務で不在とする場合は議員を辞職するよう提案したが、これは複数の有権者の強い反対に受けられることとなる<sup>47</sup>。海軍士官ならびに議員としてのこれまでの活動の結果、コクリンは、イギリス国内の敵と海外の敵、すなわち旧き腐敗とナポレオンに対抗しうる英雄として、人びとから高い期待を寄せられていたことがその大きな理由となろう。また当時、アメリカ合衆国との戦争の状況がおもわしくなく、優れた海軍士官が必要とされたことも、コクリンへの支持を後押ししたと考えられる<sup>48</sup>。

1814年の補欠選挙は、同年2月に起こった証券詐欺事件に起因している。この事件の経緯をごく簡単に述べておこう<sup>49</sup>。ナポレオンが戦死したという偽情報をロンドン・シティに広め、公債価格を不正操作する共同謀議に関与したとして、コクリンは有罪判決を受け、1,000ポンドの罰金、キングズ・ベンチ監獄での1年間の禁固刑、晒し刑という厳しい刑が宣告された（のちに晒し刑は免除された）。さらに彼は、海軍と庶民院から追放されただけでなく、バス勲章までも剥奪されたのである。なお、コクリンの伝記作者たちの多くが彼の無実をほぼ無条件に認めている一方で、事件の状況証拠は、コクリンの関与を強くしめしていることは付言しておく。

プレイスをはじめ、ウェストミンスター委員会のメンバーにすれば、証券詐欺事件は（彼らにとって）コクリンよりもふさわしい議員を当選させる好機におもわれた。彼らは、議会からのコクリン追放を見越して、早くも1814年5月に新しい候補者を立てる動きに出ているのである。しかし、候補者をめぐる急進派の動きは分裂していた。プレイスはヘンリ・ブルームを推薦し、リー＝ハントの『エグザミナ』誌もそれを支持したものの、ホイッグである彼に反対する急進派は、カートラ

<sup>43</sup> フォークスとロスコウの経歴については、History of Parliament Onlineを確認されたい。

<sup>44</sup> E.g., Stephen Farrell, "Contrary to the principles of justice, humanity and sound policy": the slave trade, parliamentary politics and the abolition act, 1807, *Parliamentary History*, xxvi: issue supplement S1 (2007), pp. 141–202.

<sup>45</sup> British Library, Place Papers (以下、BLと略記する), Add MS 27809, fo. 28; Add MS 27840, fos. 4, 79–80; Add MS 27850, fos. 255–6, 257, 261–2; *Morning Chronicle*, 29 September 1812, p. 2.

<sup>46</sup> BL, Add MS 27840, fo. 80.

<sup>47</sup> BL, Add MS 27840, fos. 95–6; Add MS 27850, fo. 265.

<sup>48</sup> BL, Add MS 27840, fos. 94, 127.

<sup>49</sup> 1814年の証券詐欺事件にかんしては、以下を参照せよ。Paul Johnson, 'Civilizing Mammon: laws, morals, and the City in nineteenth-century England', in Peter Burke, Brian Harrison and Paul Slack (eds), *Civil histories: essays presented to Sir Keith Thomas* (Oxford and New York: Oxford University Press, 2000), pp. 301–20; Richard Dale, 'Napoleon is dead': *Lord Cochrane and the great stock exchange scandal* (Stroud: The History Press, 2005).

イト少佐を候補者として招聘した<sup>50</sup>。ホイグのリチャード・プリングリ・シェリダンも、3度目となるウェストミンスターからの出馬を試みたのである。6月5日ならびに16日に、「王冠と錨」亭で開かれた選挙集会では、議員の毎年改選、直接税納付者の有権者資格、選挙区の均等分配という議会改革要求が決議されたとはいえ、候補者についての合意はえられなかった<sup>51</sup>。あまつさえ政府も、海軍士官を候補者として出馬させようとしたのである。その場合、1812年（英米）戦争で一躍勇名を馳せたサー・フィリップ・ブルックが有力な候補者と目されていた<sup>52</sup>。このままでは、政府、ホイグ、急進派による競争選挙が避けられないかのようにみえたのである。

だが、コクリンの境遇に多くの人びとが同情し、政府に強い憤りを向けたことは、状況を一変させた。コクリンの無実を信じるかどうかは別にしても、彼の身分と地位、過去の功績を考慮して、晒し刑があまりに不名誉で厳しいとする意見が広く聞かれた<sup>53</sup>。「コクリン卿が最も尊敬される海軍士官であること、まさにネルソンの彼の勇敢さ、議員であり貴族出身というその地位を考えた場合、晒し刑という不名誉きわまる刑は、死の苦しみをただ与えるよりも何千倍も悪いものだと判断しなければならない」<sup>54</sup>。そのうえこの刑は、コクリンの犯した罪よりも、体制に反抗した急進派としての活動によるものとも考えられたのである<sup>55</sup>。コクリンの盟友であるコベットは、それゆえに、『ポリティカル・レジスタ』誌において、ウェストミンスターからの再選こそがコクリンの無実のあかしであり、有権者の義務であると何度も主張したのだった<sup>56</sup>。

コクリンの名誉剥奪への首都の人びとの憤りは、なお激しいものがあった。風景画家ジョーゼフ・ファリントンの日記によると、セント・ポール大聖堂で戦勝記念感謝祭が挙行された7月7日、大法官のエルドン卿は、コクリンの裁判を担当したエレンバラ卿と間違えられて、その帰途にコクリンの判決に憤慨した暴徒に何度も野次られたという<sup>57</sup>。7月11日にパレス・ヤードで開催された選挙集会では、彼に下された晒し刑という厳しい判決が言及されると、「筆舌に尽くしがたい人びとの憤りが起こった」のである<sup>58</sup>。こうした状況を前にして、ブルーム、カートライト、シェリダンはそろって立候補を辞退し、7月16日にコクリンは無事再選された。

このとき、コクリンの境遇が、海軍や国民のそれにしばしば重ねて語られたことも無視できない。

<sup>50</sup> BL, Add MS 27840, fos. 220–1; Add MS 27850, fos. 276–7; *The Examiner*, 10 July 1814, pp. 433–6.

<sup>51</sup> BL, Add MS 27840, fos. 225–7; Add MS 27850, fo. 278.

<sup>52</sup> *Morning Post*, 11 June 1814, p. 3; *Morning Chronicle*, 13 July 1814, p. 3.

<sup>53</sup> *Morning Post*, 12 July 1814, p. 3; *The Sun*, 7 July 1814, p. 3. Cf. Warrenne Blake (ed.), *An Irish beauty of the Regency: compiled from "Mes souvenirs," the unpublished journals of the Hon. Mrs. Calvert, 1789–1822* (London and New York: John Lane, 1911), p. 231.

<sup>54</sup> *The Champion*, 3 July 1814, p. 210.

<sup>55</sup> E.g., BL, Add MS 27840, fos. 235, 238.

<sup>56</sup> *CWPR*, xxv, 18 June 1814, cols. 769–70; 25 June 1814, col. 812; xxvi, 9 July 1814, cols. 33–4; 16 July 1814, col. 66. コクリンとコベットとの関係については、前掲拙稿「急進的なウェストミンスターを見直す」をみよ。

<sup>57</sup> Cave, Garlick and Macintye, *The diary of Joseph Farington*, xiii, p. 4553: 8 July 1814.

<sup>58</sup> BL, Add MS 27840, fo. 239; *The Times*, 13 July 1814, p. 2; Cochrane, *Autobiography*, ii, pp. 436–45: Appendix 10.

『クリティカル・レビュー』誌の編者であったウィリアム・ホーンも、コクリンの無実を信じたひとりだが、彼はコクリンの境遇をいわば政府のスケープゴートとなって1757年に処刑されたジョン・ビング提督になぞらえ、晒し刑のことを「われらが国民的名誉を傷つけ、イングランドの木の城壁 (the Wooden Walls of England) の栄光を汚すものだ」と批判している<sup>59</sup>。先述のコベットも、コクリンの無実と名誉回復を主張するために、『レジスタ』誌でこう記したのだった。

議員として正しくも再選されたゆえに、閣下に着せられようとした汚名が、その釈放によりすぐに返上されることは議会の名誉となるだろう。ウェストミンスターの有権者にとっても、彼らの代表の誰もが不名誉な境遇に置かれるべきではないし、これが彼に向けられているわけだが、そこから救うべくその特権がただちに行使されることは、有権者の名誉となる。彼が頻繁に、また雄々しくその権利を守ってきた海軍にとっても、彼を現在の束縛から解放することは、その名誉となる。何よりもコクリン卿の解放は、国民の名誉となる。多くの戦闘で彼は成功をおさめてきた。また彼は、勝利に満ちたその短い経歴において、過去の海軍の英雄たちよりもずっと輝かしい栄光を、絶え間ない生命の危険にさらされながらも国民のために獲得してきた。こんな彼が、はたして取るに足らない人間だということか。不滅のネルソンの名声に匹敵する人物を薄暗い監獄にとじこめることで、その勇敢さに報いるというのか<sup>60</sup>。

本章の考察から、以下のことが指摘されよう。1812年と1814年の2つの選挙において、コクリンの対立候補擁立にウェストミンスター委員会が失敗したことは、有権者への彼らの影響力が限られていたことを示唆している。少なくともコクリンの出馬や当選にかんしては、同委員会の役割は二義的な意味しかもたないばかりか、そればかりを重視して急進的なウェストミンスターを考えても不十分であろう<sup>61</sup>。むしろ、海軍とその英雄に信頼と期待を寄せる有権者や市民の支持こそが、コクリンの重要な政治基盤たりえたのである。このように、当時のラディカリズムの歴史的意義を考察するうえでも、ウェストミンスター選挙区における海軍の英雄の存在がもつ重要性は決して見逃すことはできない。

<sup>59</sup> *The Critical Review: or, Annals of Literature*, series the fourth, vi, December 1814, p. 670. ホーンにかんしては、金澤、前掲論文、453-4頁のほかにも、Ben Wilson, *The laughter of triumph: William Hone and the fight for the free press* (London: Faber and Faber, 2005) もみよ。

<sup>60</sup> *CWPR*, xxvi, 27 August 1814, col. 260.

<sup>61</sup> Main, 'Radical Westminster'; Baer, *The rise and fall of radical Westminster*.

#### 4. ナポレオン戦争後のラディカリズムとコクリン

19世紀初頭のラディカリズム、とりわけワーテルローの戦い以降の「民衆ラディカリズムの英雄時代」を考えるうえで、これまでの研究ではあまり重視されていない要因がある。それは、当時広く認められた軍事専制（military despotism）への人びとの強い警戒心や反発である。本来この言葉は、ナポレオンの帝政に向けられたものだが、戦後になると体制への批判として適用されたのだった。この変化には、ナポレオンへの共感や同情をつうじた、イギリスの自由や国制、歴史をめぐる人びとの認識のあり方が反映されていた<sup>62</sup>。

軍事専制への批判は、名誉の授与のようなコメモレイションの領域でも惹起された。戦争中、軍人向けの高級勲章と化していたバス勲章は、1815年1月に3等級に区分されると同時に定員が大幅に増やされた。しかしこれは、議会の内外で人びとの強い批判を招くこととなる。チャールズ・ウォトキン・ウィリアムズ＝ウィンは、軍人への名誉の拡大がイギリスの自由に深刻な結果をもたらすとして議会で警鐘を鳴らしたほか<sup>63</sup>、コベットやリー＝ハントといった論者たちも、軍事的・大陸的で、したがってイギリス的ならざる特徴から、バス勲章を「新レジオン・ドヌール勲章」と呼んで批判したのである<sup>64</sup>。同年6月のワーテルローの戦いの直後、外相カースルレイが、戦死した陸軍少将以上の軍人すべてを対象に、モニュメントを以後建立するように提案したことも、軍事専制への傾向を人びとに印象づけたことだろう<sup>65</sup>。

こうしたナポレオン戦争後の状況にあって、海軍の「神話」には、どのような意味があったのか。それは、ラディカリズムにもなお有利に働いたのだろうか。こうした問題を考えるために、以下では、戦後の改革運動においてコクリンが果たした役割と、海軍をめぐる人びとの認識や想像力を検討することとしよう。

1814年の証券詐欺事件は、コクリンの経歴において重大な転機となった。「雄弁家」ヘンリ・ハントは、この事件を体制による陰謀劇とみなして、回想録に次のように記している<sup>66</sup>。もし、コクリンが地位と名誉を失うことがなければ、「閣下が真の急進派になることは決してなかったと確信している。わたしは、いま彼がそうだと望んでいるし信じてもいるが」。ただし、彼はこうも続けている。「この事件がなければ、いまも彼は、海軍の誇りであり続けただろう」<sup>67</sup>。たしかに、証券

<sup>62</sup> Stuart Semmel, 'British radicals and 'legitimacy': Napoleon in the mirror of history', *Past and Present*, clxvii (2000), pp. 140–175; idem, *Napoleon and the British* (New Haven and London: Yale University Press, 2004).

<sup>63</sup> *PD*, 1st ser., xxx, cols. 333–4; Commons, 22 March 1815.

<sup>64</sup> *Morning Chronicle*, 7 January 1815, p. 2; *CWPR*, xxvii, 21 January 1815, cols. 80–2; *The Examiner*, 15 January 1815, pp. 35–6; 22 January 1815, pp. 49–50; 29 January 1815, pp. 65–6.

<sup>65</sup> *PD*, 1st ser., xxxi, cols. 913–5; Commons, 21 June 1815. 前掲拙稿「帝国の殉教者たち」、57頁もみよ。

<sup>66</sup> ハントと19世紀前半のラディカリズムの展開については、John Belchem, '*Orator*' Hunt: Henry Hunt and English working-class radicalism (Oxford: Clarendon Press, 1985) をみよ。

<sup>67</sup> Henry Hunt, *Memoirs of Henry Hunt Esq., written by himself, in his Majesty's jail at Ilchester, in the county of Somerset*, 3 vols (London, 1820–2), iii, pp. 302–3.



図2 ジョージ・クルックシャンク「カンバランドの財政調査、あるいは物乞いの請願」（1815年、英国博物館蔵）© The Trustees of the British Museum.

詐欺事件による政治的殉教者の側面は、ナポレオン戦争後のコクリンの活動を考えるうえで重要な特色をなしている。ここでは、コクリンが体制に強く対抗した2つの事例をみておこう。

ひとつめは、1815年7月に庶民院でおこなわれたカンバランド婚姻法案（the Cumberland Establishment Bill）の審議である。国王の五男カンバランド公（のちのハノーファー王エルンスト・アウグスト）の結婚にあたり、ワーテルローの戦いの直後から、議会では年金給付について検討されていたものの、結局、7月3日の第2読会で126票対125票とわずか1票差で否決された。この審議には、キングズ・ベンチ監獄から釈放され、議会に復帰したばかりのコクリンも出席し、反対票を投じたのである<sup>68</sup>。王族への年金という体制の腐敗をめぐるこの問題にかんして、コベットは、コクリンの復帰がなければ否決はなかったと考え、「彼の敵にたいする完全なる勝利」であり、無実のあらわれだと主張した<sup>69</sup>。諷刺版画家ジョージ・クルックシャンクも、コクリンの役割を強調したひとりである。「カンバランドの財政調査、あるいは物乞いの請願」（図2）において彼は、コ

<sup>68</sup> PD, 1st ser., xxxi, cols. 1074–82: Commons, 3 July 1815.

<sup>69</sup> CWPR, xxviii, 8 July 1815, cols. 10–4.



クリンが放った大砲の一撃が、カンバランド公の要求を退けたと描いたのである<sup>70</sup>。

当時のコクリンが、どの急進派よりも、王室や政府に強力に反対しうる立場にあったという意味でいっそう興味深い事例とは、翌1816年7月末にシティ・オヴ・ロンドン亭 (the City of London Tavern) で開催された製造・労働貧民救済協会 (the Association for the Relief of the Manufacturing and Labouring Poor) の集会である。ヨーク公が議長をつとめたこの集会には、ケント公、ケンブリッジ公ら王族、大蔵大臣ニコラス・ヴァンシタート、カンタベリ大主教、ロンドン主教、ウィルバフォースらが主要なメンバーとして出席しており、下層民にみられる深刻な困窮の解決に向けて議論し寄付金を募ることを目的としていた。ところがコクリンは、「大規模な軍事体制、公金の浪費、くわえて膨大な国債の負担」という「腐敗のシステム」こそが人びとの苦境の原因であるとして、王族や閣僚たちを糾弾したのである。最終的には、募金の実施は決議されたとはいえ、コクリンの行動のために、会は大きく混乱したまま終了したのだった<sup>71</sup>。

シティ・オヴ・ロンドン亭におけるコクリンの行動は、彼にたいする人びと、とくに急進派の評価を大きくあらためることになった<sup>72</sup>。コベットが、コクリンを称賛したのはいうまでもない。「コクリン卿は、イングランドの全国民からの感謝に値する」。彼はまた、『ポリティカル・レジスタ』誌にこうも記している。「数日前、コクリン卿の勇敢なる支援により達成されたかにみえる勝利は、ワートルローの戦いよりもはるかに、名声へのモニュメントにみあうものだ<sup>73</sup>。とりわけ興味深い反応をしめしたのは、フランシス・プレイスである。コクリンに長年批判的であった彼さえも、その成功を率直に称え、その人気の高さを認めざるをえなかった。「ヨーク公やケント公、カンタベリ大主教、大蔵大臣、白人の天敵にして老いてなお盛んなキリスト者 [ウィルバフォース] への比類なき勝利は、[ウェストミンスターからの] 再選を確実にするにあたり必要なすべてをそろえるにいたったのだ<sup>74</sup>。しばらくのあいだ、コクリンは連合王国各地で称賛され、さまざまな共同体から感謝を述べた式辞を寄せられた。1816年10月のロンドン市長選でも、コクリンの友人である現市長マシュー・ウッドの支持者のひとりが、「とりわけコクリン卿は、英雄として、政治家として、正しく賛辞を受けるに値します」と述べたのである<sup>75</sup>。

当時のコクリンの人気は、しかし、ラディカリズムに微妙な影を落としたといえるかもしれない。コベットやヘンリ・ハントは、改革にかんする見解の相違もあって、バーデットをもはや信用して

<sup>70</sup> BM 12591: *A Financial Survey of Cumberland or the Beggars Petition* (1815).

<sup>71</sup> *The Times*, 30 July 1816, pp. 2–3; *Morning Chronicle*, 1 August 1816, p. 2; *CWPR*, xxxi, 3 August 1816, cols. 135–60; *New Monthly Magazine and Universal Register*, vi (1816), pp. 160–2. コクリンの行動や急進派への批判として、*Anti-Gallican Monitor*, 4 August 1816, pp. 4717–8.

<sup>72</sup> E.g., *Independent Whig*, 4 August 1816, pp. 244–6; *Morning Chronicle*, 1 August 1816, p. 2; 22 August 1816, p. 2. プレイスは、ジェイムズ・ミルにあてた書簡のなかで、集会におけるコクリンの行動を詳述している。BL, Add MS 35152, fos. 199–200: Francis Place to James Mill, 2 August 1816.

<sup>73</sup> *CWPR*, xxxi, 10 August 1816, col. 168; 24 August 1816, cols. 228–9.

<sup>74</sup> BL, Add MS 27809, fo. 31.

<sup>75</sup> *The Times*, 2 October 1816, p. 3.

おらず、かわってコクリンを、改革の最も熱心な提唱者とみなしていたのである<sup>76</sup>。「イングランドの自由の最後の100日間にかんする歴史」(‘History of the Last Hundred Days of English Freedom’)においてコベットは、上述したコクリンの働きを高く評価する一方で、バーデットへの強い疑念を表明している<sup>77</sup>。このような彼の批判的な態度は、1818年のウェストミンスター総選挙でバーデットが苦戦する一因となった<sup>78</sup>。またハントは、改革をもとめたブリストルなど諸都市からの請願書を議事に提出するさいに、バーデットではなく、「圧政に迫害された偉大なる愛国者」であるコクリンに託したのである<sup>79</sup>。ナポレオン戦争中、旧き腐敗の打倒と議会改革に向けて、ともかくも成立していた急進派の結束は、崩れつつあった。

とき同じくして、コクリンは海軍の英雄として、人びとの注目と期待をふたたび集めることとなる。1817年4月、チリ政府の使者としてロンドンを訪問中のホセ・アルバレスの要請を受けたコクリンは、スペインからの独立戦争のために海軍司令官に就任することを承諾した。彼のこの選択は、海外における専制を打倒し、自由の大義を実現させるものとして、急進派をはじめ多くの人びとが歓迎したことは想像に難くない<sup>80</sup>。その例として、少し長くなるが、ホーンによる『リフォーミスツ・レジスタ』誌の記事を以下に引用しておこう。

[イングランドは] 世界の中枢部である。アジアと西インド諸島を統治し、アフリカに文明をもたらし、アメリカ合衆国の親でもある。そのイングランドは、いま南アメリカの解放者となることを運命づけられているかのようだ。ところがイギリス政府は、偽りの慈悲と正義を掲げつつも、専制と迷信で盲目となったスペイン玉座に居座るもの (the thing) と忌まわしくも同盟しているので、南アメリカの人びとを解放することで、このペティコートをもとった君主に背くことは選ばないかもしれない。その臣民たちが、名状しがたい不満のゆえに独立をもとめて戦っているというのに。だが、人類の幸福の歴史上この偉大な出来事は、イギリス人の才能によりきつと達成されよう。かの勇敢で高潔なコクリン卿、その名は世界中でイギリスの敵を震えあがらせており、また議会におけるその存在は、夜ごと自由の敵を悩ましている。高貴にして不遇なコクリン卿こそが、その勇敢さと行動

<sup>76</sup> Cf. BL, Add MS 27809, fos. 49–50, 54–5. サミュエル・バンフォードもまた、コクリンとバーデットの両名に面会したときに受けた印象を自伝のなかで対照的に記している。Henry Dunckley (ed.), *Bamford's passages in the life of a radical and early days*, 2 vols (London: T. F. Unwin, 1893), ii, pp. 21–2, 24.

<sup>77</sup> CWPR, xxxii, 13 September 1817, cols. 737–68, esp. cols. 742–3, 745–6.

<sup>78</sup> 1818年のウェストミンスター選挙にかんしては、以下を参照。W. E. S. Thomas, *The philosophic radicals: nine studies in theory and practice, 1817–41* (Oxford: Clarendon Press, 1979), pp. 46–94; Ann Hone, *For the cause of truth*, pp. 278–88.

<sup>79</sup> *Morning Chronicle*, 3 December 1816, p. 3; Hunt, *Memoirs*, iii, pp. 424–9.

<sup>80</sup> E.g., *Triumph of Southwark: a full report of the speeches delivered at the anniversary dinner given by the free electors of Southwark, in commemoration of Sir Robert Wilson's election for the borough ... the 22d of June, 1819, etc.* (London, 1819), p. 8; *An authentic narrative of the events of the Westminster election* (London, 1819), pp. 363, 368.

から、南アメリカの解放を最終的に成し遂げることをわたしは信じて疑わない。「(数ヵ月のあいだ) 南アメリカで展開中の作戦を検分すると決断した」と彼は発表した。**バスク・ロードの英雄**が、南アメリカにおける軍事作戦をいったいどう検分するというのだろうか。[ゴシック体は筆者によるもの、原文ではすべて大文字]<sup>81</sup>。

ラテンアメリカの環大西洋革命におけるコクリンの活動にふれることは、本稿の目的から大きく逸れることになるので、これ以上立ち入って議論はしない<sup>82</sup>。しかし、次の2点だけは指摘しておきたい。まず南米諸国の独立戦争は、カトリックで専制的なスペインとの抗争を意味しており、その限りでは、プロテスタントにして自由を尊重するというイギリスの国民意識を活性化する側面があった。また、のちの自由貿易帝国主義をおもわせる、イギリスの南米への経済的進出や帝国拡大の期待感もみられた。やや時代は下るが、1824年6月に南米諸国の独立承認をもとめるマンチェスタの請願書を議会に提出したさいに、コクリンのイギリス海軍復帰を進言したサー・ジェイムズ・マッキントッシュの演説が、そうした例のひとつである<sup>83</sup>。

南米に向かうにあたり、コクリンは大きな野心をいだいていた。やや余談めくが、興味深いエピソードであるうえに、ナポレオンへの急進派の共感も示しているので、ここで簡単に紹介したい。それは、セント・ヘレナ島で虜囚の身にあるナポレオンを救出し、独立を達成した南米諸国の皇帝に即位させるというものである<sup>84</sup>。この計画には、コクリンをはじめ、当時アメリカに亡命中のコベットやサー・ロバート・ウィルソン将軍といったイギリスの急進派たち、フランスのボナパルト派であるラタピエ大佐やブライエ将軍たちが関与していた<sup>85</sup>。しかし、彼らの動向は、イギリス・フランス両政府に監視されていたうえに、ナポレオンが1821年に病死したため、この計画は実行に移されることなく終わったのである。

<sup>81</sup> *Hone's Reformists' Register and Weekly Commentary*, xi, 27 September 1817, pp. 315–6.

<sup>82</sup> これについては、コクリン名義の記録が存在する。Thomas, Earl of Dundonald [Lord Cochrane], *Narrative of services in the liberation of Chili, Peru, and Brazil, from Spanish and Portuguese domination*, 2 vols (London, 1859).

<sup>83</sup> *PD*, 2nd ser., xi, cols. 1475–8: Commons, 21 June 1824. マッキントッシュについては、Patrick O'Leary, *Sir James Mackintosh: the Whig Cicero* (Aberdeen: Aberdeen University Press, 1989) をみよ。Cf. Gabriel Paquette, 'The intellectual context of British diplomatic recognition of the South American Republics, c.1800–1830', *Journal of Transatlantic Studies*, ii (2004), pp. 75–95.

<sup>84</sup> Emilio Ocampo, *The emperor's last campaign: a Napoleonic empire in America* (Alabama: University of Alabama Press, 2009).

<sup>85</sup> Charles Vane, Marquess of Londonderry (ed.), *Memoirs and correspondence of Viscount Castlereagh, second Marquess of Londonderry*, 12 vols (London, 1848–53), 3rd ser., iii, p. 381: Charles Bagot to Lord Castlereagh, 6 October 1817. この陰謀へのコクリンの関与は、1818年9月に『クーリエ』紙によってスクープされた。*The Courier*, 18 September 1818, p. 3. また、Edward A. Bloom and Lillian D. Bloom (eds), *The Piozzi letters: correspondence of Hester Lynch Piozzi, 1784–1821 (Formerly Mrs Thrale)*, 6 vols (Newark DE: University of Delaware Press, 1989–2002), vi, p. 221: Hester Lynch Piozzi to Marianne Francis, 30 September 1818 もみよ。

## おわりに

本稿の大きな目的とは、長い18世紀のイギリスにおける海軍の「国民的神話」にかんして、とくにナポレオン戦争時代に注目して考察することにあつた。冒頭でも述べたように、18世紀末以降、体制が海軍の「神話」の横領にもっぱら成功したとされる。このことは、アメリカ独立戦争以降のパトリオティズムの変化とも密接に関係していよう<sup>86</sup>。しかしながら、フランス革命時代とナポレオン戦争時代とを一括して扱うのではなく、両者を区別し、後者がもつ固有の意味に留意しなければ、本稿の課題に迫ることはできない。

なるほど、ナポレオン戦争時代においても、政府は海軍の勝利と英雄の政治的利用をたびたび試みており、ある程度まではフランス革命時代と同じことがいえるかもしれない。だが、ナポレオン戦争とその戦後の時代にあつては、旧き腐敗のみならず、陸軍や軍事専制への強い警戒や反発を背景にして、海軍の「神話」が、好戦的・愛国的な様相を強めていたラディカリズムにとっても有利に働く条件が整っていた。しかもコクリンは、ウェストミンスターという著名な海軍の英雄を代表として選出し続けてきた選挙区の議員であつたのだ。急進的なウェストミンスターにおけるコクリンの存在は、海軍をめぐる人びとの願望や想像力と、自由や改革の大義とを結びつける役割を果たしたと考えられる。

コクリン自身、議会改革運動にかかわってゆくうえで、英雄や政治家としての立場が、ウェストミンスタの有権者からの支持に多くを負っていることを意識していた。1814年の証券詐欺事件による名誉剥奪のあとでは、なおさらそうだっただろう。1818年6月、庶民院で最後の演説をおこなったコクリンは、彼を「絶望的で邪悪な陰謀から救った」ウェストミンスタの有権者への感謝を感動的に伝えただけでなく、最晩年に出版した自伝を彼らに献呈したのである<sup>87</sup>。その死後、コクリンが、ネルソンやウェリントン公らナポレオン戦争の英雄が眠るセント・ポール大聖堂ではなく、ウェストミンスター寺院に埋葬されたのは、彼とウェストミンスター選挙区とのつながりゆえのことだった<sup>88</sup>。

[付記] 本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金（若手研究（B）、課題番号：JP21720271）による研究成果の一部である。

<sup>86</sup> E.g., Hugh Cunningham, 'The language of patriotism, 1750–1914', *History Workshop Journal*, xii (1981), pp. 8–33; Linda Colley, *Britons: forging the nation, 1707–1837* (New Haven and London: Yale University Press, 1992), pp. 210–2 [川北稔監訳『イギリス国民の誕生』（名古屋大学出版会、2000年）].

<sup>87</sup> *PD*, 1st ser., xxxviii, col. 1151; Commons, 2 June 1818; *Daily News*, 1 November 1860, p. 4.

<sup>88</sup> *Ibid.*, 8 November 1860, p. 2; [John McGilchrist,] *The life and daring exploits of Lord Dundonald* (London: James Blackwood, 1861), p. 231.